



いま 現在を生きる

「つくし作業所」で広報づくりを担当

原 五郎さん(白樺町)

町内在住の精神に障害がある人の「一人ひとりの夢や希望を実現」する場として「つくし共同作業所(末広)」が平成14年6月に開所。『作業でない作業』をモットーに『語らいをすること』や『自分のやりたいこと』をサポートしてくれる人に支えられながら19人が楽しく作業しています。

そんな作業所で広報誌づくりを担当し現在広報局長を務め、「つくし」のスポークスマンと呼ばれている原五郎さん。

原さんが広報を始めるきっかけとなったのは、もっと“つくし共同作業所”のことを知ってもらいたいから・・・



手作りの心温まる広報誌を発行して1年。「発行したすぐから次の紙面づくりを考えている」という原さんが当別町民になったのは平成14年7月。それまでは月形町の社会復帰施設で約25年間集団生活を送っていました。

訪問看護や配食サービスなど生活のサポートを得て当別町に移り住み、11月に新聞報道で“つくし共同作業所”のことを知り「お友達づくりから始めたい」と作業所に通い始めました。

原さんは「月形の施設で広報誌を作った経験もあり、昨年1周年を迎えたつくし作業所の活動をもっと町民に知ってもらいたかった」と広報誌づくりのきっかけを振り返ります。

「平成15年6月の第1号発行の時はみんなに見てもらえるかなと不安が一杯でしたが、激励の電話をもらったり、多くの人が見てくれたことが分かってとても嬉しかった」と語ります。

年4回発行する広報誌は原さんを筆頭に、ボランティアの学生などで7～8名が役割分担して紙面を作っています。表紙のイラストは、すべて原さんが担当し自分で描かないと気がすまないというほど力が入っていて、手書きの紙面づくりと共に、第1号からこだわりを持ち続けています。広報誌を手書きで発行することで作り手の温かさが感じられます。

また、原さんの独自の視点で見る「ゆとろでお世話になった人々」シリーズや「医療大学で精神保健福祉論の特別講師をした大学講義の報告」など、どのような紙面にしたら喜ばれるかと常に考えて構成しています。

スタッフ・ボランティアの方と2カ月前から編集会議を重ね、手作業で約2,000部の製本を行い、出来上がるのが毎回とても楽しみで苦労が報われると顔をほころばせます。

出来上がった広報誌は、原さんが当別町に住んでからイベントなどに参加することなどで広げたネットワークを使い知人に直接配ったり、広く町民に読んでもらえるよう町内会の回覧を利用するなどしたくさんの人に手にしてもらうために努力しています。また、毎号を『おはよう町長室』で町長に届けたりもしています。

つくし作業所の広報誌づくりからつぎつぎと世界を広げる原さんは「当別に来ているんな人にお世話になりました。これからは自分が当別町で障害者やお年寄りなどを介護できる立場になりたいと思っています」と強い思いを持ってホームヘルパー3級の資格取得を目指す意欲に燃えています。

「当別町を福祉のまちにしていきたい」と大きな夢を語る原さんは、更なる活動をつくし作業所のスタッフと進めていくことでしょう。

作業所スタッフが参加するイベント紹介!

市民交流音楽会

- ◇5月17日(月) 13時30分
- ◇スタッフの語らいや演奏を行います。

作業所の新たな拠点

(仮称) まちの森「つくしの家」がオープン
(弥生・「旧紀州艦」)

- ◇5月28日(金) 10時
- ◇当日はフリーマーケットなどイベントがたくさん

